

《書評》

ジェイコブ = M. ランドー 編： アタテュルクとトルコの近代化

Jacob M. Landau (ed.):
Atatürk and the Modernization of Turkey,
Westview Press, Inc./E. J. Brill

鴨 澤 巖

I まえがき

トルコの近代化は、しばしば日本の近代化と比較される。ともに西欧文化圏の外にあって同じ19世紀に西欧化としての近代化を推し進めたので、比較の食指が動く（Rustow, 1964 参照）。しかし、現在の両国の状況をみれば、到達している水準は視野の外におくとしても、近代化がたどってきた道筋が両国では大きく異なることが理解されよう。大衆の間に宗教的な環境が濃密に存在するか否か、「地方」の民衆の間に中央政府との緊密な関係が存在するか否か、大都市地域に広大な自然発生集落が存在するか否か、労働者輸出が存在するか否か。これらの指標が明らかにする両国の差異を、ただ異なるといった認識の自己目的にすることはほとんど無意味である。われわれ日本人にとっては、トルコの近代化過程の検証を通じて、自社会の近代化過程のありかたを同定するよすがとしなければなるまい。経済指標を中心に、日本を一方的に近代化の優者、トルコを一方的に近代化の劣者としてすませられるような安易な立脚点にわれわれは今立っているのであろうか。資本主義的価値指標の過度の貫徹、目標喪失状況の蔓延は、われわれが今、かつてないほどの経済的繁栄を享受しているだけに、深刻な空虚を感得させるのである。もとより、この目的に近づくためには、過度の目的意識によって認識の目を曇らせてはならないのであるが。

II プロローグ

1980年9月のクーデターによって政権を掌握したトルコの軍部が、民政に復帰するために

行った1983年11月の総選挙では、破天荒な事態が生じた。あろうことか、軍の推薦政党を破って祖国党が勝利し、同党の党首トゥルグット・オザルTurgut Özalが首相の座についた。かえりみれば、1980年9月の軍事クーデターは、そのときまで毎日10人以上もの人命がテロリズムによって損なわれ、しかもそのような事件がたかだか日々のニュースの埋め草程度にしかになっていないほど無秩序な状態にあったトルコ共和国に、見事に秩序を回復する事件であった。まさにそのことによって、国民の間での軍の人気はきわめて高まった。クーデターの最高指導者で、大統領職に就任したケナン・エヴレンKenan Evrenは、この国の創設者で不世出の英雄と仰がれているアタテュルク Atatürk の再来とまで称讃されるようになっていた。いっぽう、オザルは、1980年9月に成立した軍事政権に招かれて、日本でいえば経済企画庁にあたるが、しかし軍事政権下でそれとはおよそくらべものにならないほどの強力な権限を与えられていた国家計画庁の長官に任ぜられた。オザル氏はその要職を成功裡にこなし、債務、インフレ、貿易赤字に悩んでいたトルコ経済を見事に建て直して、人望を得た。以上の経過が示すように、オザル氏は反軍的人物などではなく、したがって今回の選挙にあっても、エヴレン大統領の影響下にある軍が推薦し、エヴレン大統領自身が肩入れをした勢力にたいする反対勢力の結集者として自らを浮上させるといったことなどはなかった。(そのようなことは、軍が既成の政治勢力を押さえこんで、選挙の舞台に登場させなかった点からみても、あり得ることではなかった。)前記の選挙における破天荒な結果は、結局、軍が社会秩序の回復者としては人気があるが、政治の当事者としては人気を得られなかったということを示したものである。げんに、選挙直後にトルコから伝わってきたのは、軍の過度の肩入れが民衆の反撥を招いたという解釈であった。

もしそうであったとすれば、政治においてこれほど軍を不人気にさせている原因は何であろうか。

それを解く鍵は、この国の政治上の最高のイデオロギー（イデオロギーと呼ぶならば、であるが）であるケマリズムと、この国の政治の実態との関係、ケマリズムにたいする国民各層の態度といったものに求められなければなるまい。

Ⅲ ケマリズムについて

「アタテュルクとトルコの近代化」の書評をおもいたったのは、この書物がケマリズムの問題を正面からあつかっているからにはほかならない。

しかし、その紹介に入るまえに、ケマリズムについて簡単に説明しておく必要がある。

元来、1923年に達成された共和国革命は、指導者アタテュルクの優れた「現実感覚と卓抜なタイミング」(Landau, p. xi, 以下、西暦年ぬきの記載は書評対象の「アタテュルクとトルコの近代化」を指す)を通じて達成されたものであって、はたして「ケマリズムのイデオロギーというものは存在するのだろうか」(Dumont, p. 25) どうかについては「多くの著述家たちが(むしろ)その思考体系の欠如を指摘してきた」(ibid.) ところである。もっとも、

体系的なイデオロギーによって裏づけられていたならば、アタテュルクの共和国革命は「現実感覚と卓抜なタイミング」を持ち合わせがたく、現実の歴史がくりひろげてみせたほどの成功をかちとることができたかどうかは疑問である。その点からいえば、もしケマリズムに思考体系といえるものが存在しなかったとすれば、それは共和国革命の事業にとって、むしろ長所とすべきところではあっても、けっして短所とすべきところではないのである。

事情はこのようであるから、ケマリズムを「トルコ共和国革命の広汎な分野にわたる指導理念」(評者)であるとする以上に、瑣末な規定を与えて厳密に論じようとするのはあまり有効ではないだろう。ちなみにトルコ言語協会編のトルコ語辞典(T. D. K. : Türkçe Sözlük, 1974)によれば、ケマリズムはすなわちアタテュルク主義であって「アタテュルクが開拓した革命と発展の方法」である。

とはいうものの、それが現実にはひとつの革命を指導した以上、具体的な表現を表出させずにはおかなかった。それは、革命を指導した政党の綱領として姿をあらわした。いわゆる「6本の矢」である。「6本の矢」は、1931年にまず国定の中等教科書に掲載され(İnan, 1972, s. 23 参照)、ついで同じ年に、トルコ共和国唯一の政党であった共和人民党の綱領として、大会で採択された。それは「共和主義、民族主義、民衆主義、革命主義、俗権主義、エタティズム」の6原則から成り、6本の矢と呼ばれた。

「6本の矢」が「ケマリズム・イデオロギーのすべてを包含しない」(Dumont, p. 26)ことは確かである。ケマリズムは、革命を指導する理念であるからには当然のことながら、革命以前から存在していた。たとえば、共和国成立後、1930年代に入ってはじめて具体的に発足したエタティズムでさえも、オスマン帝国時代からの背景を抜きにしては語れない。「6本の矢」は、1930年代のトルコ共和国の現実に対応して出現した実践的な綱領であるから、過去にさかのぼってケマリズムの概念を整理したものであるはずもない。

だがそれにもかかわらず、1980年代のトルコにおけるケマリズムの地位を理解するにあたって、共和国初期の指導理念である「6本の矢」から出発することは、当を得ている。それは、たんに「6本の矢」以外にはケマリズムを明示する概念が求めにくいという消極的な理由からだけでなく、共和国の初期におけるケマリズムの地位と役割を明示した「6本の矢」こそが、現在の共和国におけるケマリズムの地位と役割を同定するのに最も適切な指標であるという積極的な理由にもよるのである。

「6本の矢」の各項目について簡単な解説を付しておこう。

まず共和主義であるが、その源泉はオスマン帝国末期の「立憲王政的共和主義」にある。あたかもわが国の明治維新の場合と同じく、元来外来思想であった共和主義は、一部知識人の思想であり、運動であって、広汎な民衆とは無縁であったのは、いたしかたないことでもあり、当然なことでもあった。とはいえ、このことが共和国革命における革新的エリートと大衆、中央と地方に分断をもたらすものであったことは否めない。

民族主義も、その源泉はオスマン時代に求められる。少なくとも結果的に、少数民族であるギリシア人やアルメニア人、ユダヤ人等に特権を付与し過ぎたオスマン帝国のミレット制

にたいする批判から、汎イスラミズムなどではなく、トルコ人民族主義へ向かうことになった。この方向は、きわめて当然の、かつ時代環境からみて進歩的なりゆきではあったが、同時に、共和国内の東部において自立の方向を求める分力をもった有力少数民族であるクルド人とは融和しがたい方向が生じたことも確かである。民族の統一は、非同化少数民族問題解決のために、言語と文化の統一を求める方向で実行されることになった（Dumont, p. 31 参照）ために、言語と文化を異にするクルド人にとっては、矛盾は大きく深刻なものであった。けだし、クルド人映画監督ユルマズ・ギュネイ Yılmaz Güney の映画の世界が迫力をもって現代を描くことができたゆえんである。

民衆主義は、上述の民族主義とは共軛的な綱領として理解することができる。民衆主義成立の背景には、帝政ロシアのナロードニキの影響がみられる（Dumont, pp. 31~32, Akural, pp. 136~137）が、民衆主義をオスマン帝国内で唱導したのは帝政ロシアから移住してきたタートルやアゼルバイジャンの知識人であった。こうして、少数民族の平等を求める方向の命題になり、「6本の矢」のなかで、民族主義と民衆主義は共軛性を帯びることとなる。

革命主義は、19世紀初め以降の伝統をもち、共和国革命の遂行期には最も重要な命題であった。しかし、共和国成立後8年も経過した1931年ともなれば、ケマリズムを包括的に表現する「6本の矢」の不可欠の構成部分であるとはいえ、時代はもはや「革命主義」を必要としなくなっており、いやそれはむしろもはや不要なものであった。したがって、読みかえが求められる。共和国が成立した1923年には早くも、「これは改革のことであると党自体が規定する」（Akural, p. 141）。しかも改革は「文化の面においては急進的に行われたが、社会経済の面ではむしろ現状維持にとどまった」（*ibid.*）。

俗権主義は、きわめて重要な命題である。本来的には宗教の世界と俗界との分離を意味するはずであったが、結果的には伝統と革新の対立を意味することになった（Dumont, p. 36 参照）。俗権主義の起源は、オスマン朝のアブデュルメジット Abdülmecit 治世時にフランスの刑法・商法の影響を受けたところにある（*ibid.*）。しかし、西欧の俗権主義が国家から教会を分離する過程であったのにたいし、オスマン帝国における俗権主義の主張は、イスラームの俗事への干渉をさしとめることにあった。こうして、宗教と俗界の分離という西欧の理念が、伝統と革新の対立というオスマン帝国の、ひいてはトルコ共和国の現実に転化する。このことはそのまま、トルコ共和国における革新的中央と伝統的地方との対立・分断を意味したのであった。しかも、伝統は強く生き残り、俗権主義は十分には強力でないまま現代を迎えるにいたった。

エタティズムは「6本の矢」の中において唯一のきわめて現実的な原則である。エタティズムは二重の起源をもつ。1つは、オスマン帝国にあってすでに19世紀半ばに国家が軍需工場、紡績工場等の最大の経営者であった現実に発し、また青年トルコ党の主張にもとづいている。他の1つは、1920年代後半以降明らかになった、ソ連の計画経済の影響である。とりわけ、資本主義工業諸国における世界恐慌とは対照的に、ソ連の計画経済の成功が明らかになったときに、まだ西欧諸国からの離隔がつづいていたトルコ共和国の指導層にそれが与え

た影響は絶大であった。エタティズムは、その本義においては、社会、経済、文化、教育の諸局面への国家の干渉を意味するのである（Dumont, p. 39 参照）が、現実には経済政策として展開された。農民の不満を鎮めるための農業政策を随伴したけれども、エタティズムの本体は産業（鉱工業）政策であり、いわば中央強化の（空間的には分散の面をもっていたにせよ）政策なのであった。

ケマリズムの明示的表現としての「6本の矢」を列举して解説すれば以上のようなのである。

「6本の矢」をもってケマリズムを代表させるにせよ、その指導者アタテュルクにとって不幸だったのは、かれが共和国の元首として実際の指導にたずさわることができたのは、わずか15年に過ぎなかったことである。アタテュルクほどの偉大な政治家にとっても、15年という年月はいかにも短か過ぎる。したがって、成果のいかんによってケマリズムの当否を論ずるのは必ずしも当を得たこととはいえず、むしろわれわれは原則的評価の基準に立ってケマリズムを論ずべきであろう。

ケマリズムには、成功それ自体が失敗である、という構造がくみこまれている。しかも、そのことが、どちらかといえば前望的に認識されている場合と、成功のなかに結果的に失敗が入りこみ、とうていいかなる意味においても意図的であろうはずもない場合とがある。

前者の例としてはエタティズムをあげておこう。エタティズムはケマリズムそれ自体に似て、その歩み自体が定義をかたちづかったのであり、はじめから確乎とした定義にもとづいておし進められたものではないといえよう（Hershlag, 1968, p. 71 参照）。したがって、上述の「前望性」にも制約があるが、しかし、私企業に基礎をおくことはアタテュルク自身によって確認される路線であって、その私企業の弱体を補うものとしてエタティズムが登場した（İnan, 1972, s. 15 参照）ものである以上、エタティズムは私企業を絶滅に追い込みながら自らの発展をおし進めるように構想（という語をもし使用してもよいとすれば）されてはおらず、逆に、エタティズムの発展が私企業の発展をもたらし、その結果、後者はある一定の時期からエタティズムに抑制を加え（つまり成功をおさえ）、その活動領域を私企業に一定程度移譲することは予想の範囲内にある（もっとも、私企業がエタティズムに攻撃を加える筋道を通してこのことが実現するところまでは予想されていなかったに違いないのだが）。

エタティズムをめぐる第2次大戦時以降の展開は、戦時下の諸条件（西欧列強の戦争への没頭、民間企業にたいする軍事需要の発生等の諸条件）のもとで民族ブルジョアジーが成長し、成長した民族ブルジョアジーが今度は、それまで自己の育成に役立ったエタティズム（採算基盤にとられない国民経済の基幹産業部門の育成を中心とした国民経済の発展を導いたエタティズム）の枠を、自己の自由な発展にたいする桎梏と感じ、エタティズムがケマリズムによる政治的な機構である以上、なによりもまず政治的反対党派を組織する方向をとった。げんに、1950年以降、共和人民党の政策に反対する民主党政権を成立させ、エタティズムについても大幅な修正を加えたのであった。

後者の例、すなわち、どの点からみても前望的に成功を失敗に関連させる想定をもたなかった場合の例としては、言語改革をあげることができよう。元来トルコ語をアラビア字で表

記するには無理があり、したがってトルコ語自体の正字法をラテン字表記にもとづいて確立することは、いわばトルコ語の属性が自ら求めるところであったといえよう。1928年以降、ラテン字化をばねに正字法を確立したトルコ語は、確かにそれだけの効力を発揮した。官界における文書通達がこれによってはじめて確立した（Turan, 1984, p. 107 参照）。だが他方では、新正字法は国民の基本的な生活に関連するコーランの翻訳を提起することになった。アタテュルクもまたこの「翻訳には賛成の立場をとった」（Akural, p. 133）。このことは、ケマリズムの中央と、伝統的地方との隔離を拡大する。周知のように、イスラーム教徒の信念によれば、アラビア語は神がそれを選びたもうて、コーランを通じて人びとを教え導いた言語であり、他の言語に置き換えることはできない。コーランのアラビア語をトルコ語に翻訳するとき、宗教の伝統に生きる地方の民衆と、そこに基盤をもっている社会層にとって到底認容できるところではない。

言語改革のさらに特殊な局面における、しかし重要な矛盾は、政府による識字率の定義にあらわれる。それは「調査時に新トルコ字により読むことも書くことも知っている人は『読み書きできる人』とされる。読むことは知っていて、書くことは知らない人と、古トルコ字により読み書きを知っている人は『読み書きできる人』とはされない」というものである（Genel Nüfus Sayımı 1980, s. xv）。これは、宗教的伝統に最も強く結び付いていて、神の選びたもうたアラビア文字からの離脱を長いことがえんじなかったクルド人にとっては、深刻な矛盾の発生に他ならなかった。トルコ共和国全体としては、トルコ語表記にいっそう適したラテン字の採用は、文盲率の引き下げに資するところ大であったが、それが効果をあげればあげるほど、クルド人との間の矛盾は、少なくともかなり長い一時期、発生し、そのこともまた大きな契機になって（俗権化一般はもとより、女性のヴェールの禁止なども同様であるが）、クルド人の政府不信の念は増大せざるを得なかった。

ケマリズムのもとで、トルコ人の国家への結集が守られたばかりか、多くの局面においてそのトルコ人の国家が発展を遂げたことは歴史的事実であり、大いに評価すべきであることは論をまたないが、同時に、ケマリズムがその間に矛盾を蓄積せざるを得なかったこともまた歴史的事実である。しかも現代におけるケマリズムの役割と、したがってまたその評価が、エタティズムを典型的な例とするように、共和国準備期ならびに共和国草創期におけるケマリズムの役割とその評価とは、大きくずれるのも当然のことである。

Ⅳ 「ランドー編：アタテュルクとトルコの近代化」

本書は元来、イスラエルのイェルサレムにあるヘブライ大学のトルーマン平和研究所で1981年10月に開催された「アタテュルクとトルコの近代化」に関する国際シンポジウムの報告集である。アメリカ合衆国、イギリス、イスラエル、トルコ、西ドイツ、フランスの6カ国から下記18名の研究者が報告を行った。以下に示す。

- Dr. Sabri M. Akural, Dept. of History, Boğaziçi University, Istanbul
Prof. Metin And, Dept. of Theater, Ankara University
Dr. Paul Dumont, Centre National de la Recherche Scientifique, Paris
Prof. S.N. Eisenstadt, Dept. of Sociology, The Hebrew University of Jerusalem
Prof. İsmet Giritli, Dean, School of Journalism, Marmara University, Istanbul
Dr. William M. Hale, Dept. of Politics, University of Durham, England
Prof. Metin Heper, School of Economic and Administrative Sciences, Boğaziçi University, Istanbul
Prof. Z.Y. Hershlag, Institute of Developing Countries, Tel-Aviv University
Dr. David Kushner, Dept. of Middle Eastern History, Haifa University
Prof. Jacob M. Landau, Dept. of Political Science, The Hebrew University of Jerusalem
Prof. G.L. Lewis, The Oriental Institute, Oxford University
Prof. Osman Okyar, Dept. of Economics, Hacettepe University, Ankara
Dr. Rachel Simon, The Shiloah Center for Middle Eastern and African Studies, Tel-Aviv University
Dr. Udo Steinbach, Director, Deutsches Orient-Institut, Hamburg
Prof. Frank Tachau, Dept. of Political Science, University of Illinois at Chicago
Prof. İltur Turan, Faculty of Political Science, Istanbul University
Prof. Vakur Versan, Dean, Faculty of Political Science, Istanbul University
Dr. Michael Winter, Dept. of Middle Eastern and Islamic History, Tel-Aviv University

本書の構成と、各報告者の論題は以下のとおりである。

Preface	ix
Introduction: Atatürk's Achievement: Some Considerations, Jacob M. Landau	xi
PART 1: KEMALIST IDEOLOGY	
1. The Kemalist Regime and Modernization: Some Comparative and Analytical Remarks, S.N. Eisenstadt	3
2. Prelude to Reforms: Mustafa Kemal in Libya, Rachel Simon	17
3. The Origins of Kemalist Ideology, Paul Dumont	25
4. Atatürk's Quest for Modernism, Osman Okyar	45
PART 2: POLITICAL CULTURE AND BUREAUCRACY	
5. The Political Culture of Kemalist Turkey, Frank Tachau	57

6. The Impact of Atatürk on Turkey's Political Culture since World War II, Udo Steinbach 77
7. Atatürk and the Civil Bureaucracy, Metin Heper 89
8. Continuity and Change in Turkish Bureaucracy: The Kemalist Period and After, İlter Turan 99

PART 3: SOCIAL AND ECONOMIC ISSUES

9. Kemalist Views on Social Change, Sabri M. Akural 125
10. The Traditional and the Modern in the Economy of Kemalist Turkey: The Experience of the 1920s, William M. Hale 153
11. Atatürk's Etatism, Z.Y. Hershlag 171

PART 4: WESTERNISM AND CULTURE

12. The Modernization of Education in Kemalist Turkey, Michael Winter 183
13. Atatürk's Language Reform as an Aspect of Modernization in the Republic of Turkey, G.L. Lewis 195
14. Atatürk and the Arts, with Special Reference to Music and Theater, Metin And 215
15. Atatürk's Legacy: Westernism in Contemporary Turkey, David Kushner 233

PART 5: PERCEPTIONS OF KEMALISM

16. The Kemalist Reform of Turkish Law and Its Impact, Vakur Versan . . 247
17. Kemalism as an Ideology of Modernization, İsmet Giritli 251

本書を紹介し批評するにあたって、各報告者の報告につき個別に論じるのも一法であるが、本シンポジウムはなかなかよく構成されていて、全体としてほぼよいまとまりをもつものとなっている。したがって、ここでは、各報告について個別に論ずるよりは、このシンポジウム全体がとりくんだ主題をめぐって紹介し批評することにした。

本書の紹介と批評に入る前に、そのこと自体がすでに書評の一部となるとはいえ、このシンポジウムがトルコ国外で開催された意味について触れておかなければなるまい。アタチュルク生誕百周年にあたる1981年にはトルコ国内でも多くの行事があり、政府主宰のシンポジウム、コロキウム、集会、講演会などが行われたが、「これらは当時のトルコの（引用者注—軍事政権下の）政治的環境と軍部指導層の愛国的な感情を反映するものであった」とアクラル（前記報告者一覧表参照）が批評するとき（Akural, p.145）、トルコ国外で行われるシンポジウムの意味は対照的に明らかであろう。じっさい、本書におけるアタチュルクならびにケマリズムのとりあつかいは、十分に客観的であるようにみえる。

さて、本書を通読して最も印象に残る点は2つある。その1つは、ケマリズムがいかにかにオスマン帝国時代以来の長い歴史的背景にうらづけられた政策であるかを強く示そうとしている点であり、他の1つは、ケマリズムの妥当性が現在どのように限界に達しているかを示そうとしている点である。以上の2つの論点に、前述の18名の参加者のすべてが焦点を合わせて報告しているわけではないけれども、しかし、シンポジウム全体の基調は明らかにこれら2つの焦点をもっている。

Ⅳ - i ケマリズムとその伝統的背景

伝統上うらづけられ、どのように伝統を背負ったものであるかについて、このシンポジウムがどのようにとりあついているかを瞥見しておこう。

この場合、ケマリズムの個別の局面に即してそれを紹介するよりは、ケマリズムの担い手たちと伝統との関係についてのあつかいかたをみておくことにしたい。そのことによって問題点ははっきり出てくるのであるから。

周知のように、トルコの近代化は日本の場合と同様に西欧化であったが、「西欧化運動は19世紀初めからのものであり」(Okyar, p. 45 参照)、「タンジマートから6本の矢にいたるまで、トルコにおける近代主義には一貫した連続性がみられた」(Dumont, p. 41 参照)が、「ケマルの革命志向も19世紀初めにさかのぼる改革運動の延長上にあり、フランス革命を志向したもので、ときに西欧の民主主義よりいっそう理想主義的でさえあった」(Dumont, p. 28, p. 35 参照)。

アタテュルク、すなわちムスタファ・ケマル Mustafa Kemal (アタテュルクは父なるトルコ人の意で、国会により追贈された諡号)を共和国革命の先頭におしたた軍は、近代化のチャンピオンであったが、じつに「19世紀の近代化は軍から始まった」(Okyar, p. 50 参照)のであり、その軍は「宗教指導者ととともに、スルタン制下の最も特徴的なエリートであり、支配者集団であった」(Eisenstadt, p. 13)。共和国革命の俗権化によって、宗教指導層は支配者集団から脱落したが、共和国革命後、軍は官僚集団の協力を必要としたことはいうまでもない。

その官僚集団は「共和国初期に優位を享受したが、そのような優位は、大部分がオスマン時代からの継承によるものであり」(Steinbach, p. 80 参照)、「官僚機構の中央集権的性格もオスマン帝国以来のものであって」(Turan, p. 108)、その「オスマン帝国では民衆と官僚の間にカルチャー・ギャップがあり、官僚は、民衆からどうみられるかよりは、西欧からどうみられるかに意を用いていた」(Turan, p. 104 参照)。このような官僚は、「民衆を臣下視していたが、その85%は共和国政府の官僚となり、上意下達の姿勢にあった」(Turan, p. 103 参照)。

オスマン帝国においては「中央(政治的内側)と地方(政治的外側)との対照は顕著であった」(Tachau, p. 61 参照)が、近代化の進行につれて、その中央は「伝統主義者と近代主

義者・改革者とに分裂し、はじめは中央内部での対立であったものが、やがて地方をもまきこんだのであった」(Tachau, p. 63 参照)。

このような状況のもとでアタテュルクが構想したのは「新国家を、イスラーム教その他のあらゆるオスマンの伝統から切り離してヨーロッパ的路線で構築するという方針であり」(Steinbach, p. 78 参照)、(もっとも、現実には宗教に考慮をはらいつづけなければならなかったのであるが— Dumont, p. 30 参照) しかもオスマン帝国以来、「指導層である軍人や文官などは他の社会から断絶していた」(Tachau, p. 60 参照) のであり、さらに「トルコの政治文化は野党不信であった」(Tachau, p. 67 参照) うえ、「個人的信頼を超えた水準で政治的秩序を組織的に維持することが伝統的に弱い」(Tachau, p. 67 以下参照) ので、「アタテュルクが、スルタンの『個人』支配と人民主権の『人民』の国家の間に明確な線をひき、『民の声は神の声』であるとした」(Tachau, p. 66 参照) としても、現実には、マフムット・マカル Mahmut Makal による農村のルポルタージュが世に出るまで、真の民の声は到底中央政界にまでは届かなかったといつてよい(このルポルタージュの訳書の「訳者まえがき」および松原正毅氏による「解説」参照)。

Ⅳ - ii 現代トルコにおけるケマリズムの限界

トルコ社会には伝統的に「国なる父」という考え方があがるが、父であるためには「国家は民衆の利害への配慮を義務づけられる」(Tachau, p. 59 参照) のである。しかしながら「独立戦争中は協力した土豪劣紳は、近代化政策にはそっぽを向いた」(Turan, p. 106 参照) のであり、トルコ共和国の国民の多数を占める多くの村民にとっては「政府は合法的収奪者であり、村の生活への干渉者であって、中央につながる役人は村民にとっては個人的な関係をもって利用すべき対象に過ぎず、アタテュルクの改革については無関心であるか、敵視すべきものとみている」(Stirling, 1965, p. 268 参照) のであるから、国家による国民の有効な統合は多かれ少なかれ全面的には実現してこなかったといえよう(もっとも、スターリングの調査は、時期的にはトルコ農村における資本主義化が急速に進行する直前のものであり、地域的にはカイセリ附近の2つの村に限られているのであるから、にわかにはこれを一般化すれば批判の余地が生ずるが、しかし、これはこの種の調査が現在にいたるまで全国にわたって行われていない以上余儀ないことでもあって、スターリングの命題はトルコ社会の現在の諸状況に照らし合わせれば、今なお一般化できる面を強くもっている)。このような状況が出現する基底には「共和国になって、官僚の考えだけで近代化過程が進められ、かつかれらが特権を保持していたこと」(Steinbach, p. 85 参照) が有力な原因としてあげられよう。ただし官僚ならびに軍による独断的ともいえる近代化の遂行は、歴史的には避けられない過程であったには相違ないが、しかし、民衆がこの近代化過程においてつんぼさじきに置かれ、あるいは置かれざるを得ず、そこに矛盾が生じたこともまた避けられない結果なのであった。

現代トルコ共和国においてケマリズムが限界に達してしまっていることは、ケマリズムの

経済政策の中軸をなしていたエタティズムの崩壊と、俗権化の基盤であった宗教の公的分野からの「隔離」の終焉において顕著に明示されている。

エタティズムに関しては「40年代後期の新エタティズムを経て1964年の(共和人民党)第17回党大会における民主的エタティズムの採用」(Hershlag, p. 178 参照)により、経済建設において国家が中核的な役割を占め、外資を含む民間資本には従属的な役割しか割り当てられないできた「旧エタティズム」の状態は完全に終わりを告げた。官僚の抵抗にもかかわらず、このような変化が生じたのは、勃興したブルジョアジーと、近代化政策にそっぽを向く農村指導層との連合勢力が、外資にも自由を与えるべきであるとする点でエタティズムに批判的なアメリカ合衆国の発言権が強い条件のもとで、影響力を行使したことによるものである。ちなみに、エタティズムのこの変貌過程についてはアリベコフАлибековの「トルコにおける国家資本主義」(1966)が、国際的な関係を強く意識しながら詳細に述べているところである。

ところで、このエタティズムの変貌を新植民地化の過程としてとらえているのはベルベルオールの「危機にあるトルコ」(1982)である。かれは新マルクス主義的な立場から、トルコの発展過程をとらえているので、「共産主義への対抗を強く意識しながらアタテュルクが『トルコには階級が存在しない』とした」(Akural, p. 138 参照)のとはあい容れない立場にあるため、同書ではケマリズムがいわば全面的に否定されている。しかし、その「截り方」は明快に過ぎる。

「官僚の考えだけで近代化過程が進められた」(Steinbach, 前掲)とするならば、しかもその官僚が「他の社会から断絶していた」(Tachau, 前掲)とするならば、その結果は中央と地方の分裂である。この中央と地方の分裂は、「オスマン帝国末期に『軍事的な変化により、騎馬を提供するスィパヒ(騎士)ではなく、税金を上納する地方貴紳層アーヤーンが出現し、中央の管理下にあった封土制が徐々に半自治的封建的土地所有制へ移行した」(Tachau, p. 62 参照)とき以来、中央と地方は分裂の方向をたどったものの、共和国期に入って、中央における近代化が顕著に進行すると、中央官僚の上述の特徴が条件となりながら、たんに経済的に資本主義的な中央と前資本主義的な地方とへの分裂が促進されただけでなく、文化的にも近代主義的な中央と宗教的・伝統重視の地方への分裂が顕著に進行した。

1950年に、勃興するブルジョアジーと農村の地主層が結合して、(本書ではほとんど分析されていないが、アメリカ合衆国の圧倒的な影響下に)民主党政権が発足すると、中央と地方の分裂は、それまで黙殺されてきた地方の、中央への反逆的な進出という奇形的な収斂をみせ、それとともにケマリズムは中央でも支配的な地歩を失ってゆく。(しかしながら、中央と地方の分裂は質的に止揚されたわけではないから、前述のマフムット・マカルの農村ルポルターージュが中央の知識人に、同じトルコ共和国にこのような状況があるのかと衝撃を与えるのである。)この状況下で依然としてケマリズムの担い手となっているのは軍であって、1960年に始まり1971年、1980年と3たび生じた軍の政治への介入は、いずれもケマリズムへの復帰を名とするものであった。(しかしケマリズムそれ自体が明確な概念ではないから、60年の政変の経過が最もよく示したように、ケマリズムの名のもとに異なる政治路線が提

唱され、主導権争いを演ずることになりがちである。) プロローグに示した、1983年の選挙における軍推薦政党の敗退は、「ケマリズムは今日ではトルコにおいて競い合う諸政治勢力の一たるに過ぎない」(Steinbach, p. 86) ことを証明するに足りる事実であった。

さて、中央にたいする地方の反逆という命題が最も純粹にあらわれるのはクルド問題である。「クルド問題は誇張され過ぎている」(Kushner, p. 237) というとらえ方の当否は別として、この発言に示されるように、本書ではクルド問題は立ち入って論じられてはおらず、わずかに「1925年、ないし1930年の反乱に関連させながら、当時の政府ないしは国家の、政治的自由よりは近代化を優先させた性格を論ずる」(Dumont, p. 29, Okyar, p. 52, Akural, p. 141 参照)にとどまっている。クルド問題は、しかしながら、トルコ社会にとってはきわめて深刻な問題であり、政府の強大な軍事力のもとでそれは一見平静な状況を保っているかにみえるが、さきにも触れた、日本でも有名になったあのユルマズ・ギュネイ監督の映画の世界が描いたように、依然として深刻な問題でありつづけている。トルコ政府にとってはタブーの問題であるから、トルコ国内でクルド問題が論じられることはほとんど期待できないが、いまイスラエルで開催されたシンポジウムでもこの問題が正面切ってとりあげられないのは、イスラエルもまたシオニズムのもとでアラブ人問題を抱えこんでいて、トルコにおけるクルド問題を論ずる視角が意識的、無意識的に制限され、あるいは欠落しているからであるとおもわれる。

ちなみに、クルド問題を正面からあつかったのはイスマイル・ベシクチ İsmail Beşikçi の「東部アナトリアの秩序。社会的・経済的・民族的基礎」(1969)である。かれは勇気をもって(と自序に記しているが)このタブーに学問的な挑戦をこころみたのであった。しかし、いま言及しつつあるシンポジウムの参加者のなかには、この優れた書物からの引用を敢えてする人はいなかった。ベシクチはマルクス主義の方法を用いており、少数民族問題の立場から、階級闘争の立場からするベルベルオールーとともに、ケマリズムを容認できないものとみているようである。

V むすび

ケマリズムを中心にすえて、トルコ共和国の近代化過程を批評したシンポジウムの報告書である本書は、大きな歴史的な視野のもとで、広い局面からの接近をみせており、しかも報告者たちの多くは長い研究歴と優れた業績を有する研究者たちであるだけに、なかなかいくのある、教えられるところの多い成果をあげている。

とくに注目に価するのは、トルコ共和国からの報告者たちの報告内容である。トルコ共和国では1980年の軍事クーデター以来「粛清」が進んでおり、とくに研究者たちにたいしてはきびしい管理の手がのびていた。左派とみなされた多くの研究者たちが大学外に去ることを余儀なくされた。以上のような状況であるだけに、トルコ共和国からの報告者は、必ずしも率直な報告をしにくかったのではないかと推察されるのであったが、本書でみれば、2、

3の例外を除いて、かなり大胆に、かつ率直に、ケマリズム批判を展開しているようにおもわれる。

ところで、いま評者がしるしているこのささやかな文章といえども、シンポジウムにおけるトルコ人報告者に迷惑をかけるきっかけを与えてはならないので、固有名詞をあげていちいちの報告者についての論評を行うわけにはいかないけれども、本書を読まれる方は評者の上述の指摘を是認してくださるに相違ない。評者にとっては、現在のトルコ共和国にそれだけのアカデミック・フリーダムがあるものと解釈でき、同慶の念を禁じ得ない。

さて、本書はこのように、優れた報告者たちによって、見事な運営のもとに行われた真摯なシンポジウムの報告書であって、たいそう優れた内容をもっているのではあるが、いまままで述べたところでもいくらか言及したように、欠陥を完全にまぬがれているわけではない。

その最大のものは、西欧化志向としてのケマリズムにたいする批判のしかたが、これまた姿を変えた近代主義であって、到底、マフムット・マカルの労作のように、トルコの農村民衆の生活の声が響いてくるような、つまりは大地に腰をすえた批評の姿勢が感じられないことである。ましてや、トルコ国内で自由の享受が相対的に（内外から）強く制約されているクルド人の声を受信するアンテナは、このシンポジウムには欠けていたようである。その理由は、さきに述べたように、シオニズムとの関係で国内にアラブ人問題を抱えているイスラエルがシンポジウムの場であったからということなのであろう。

その長所も欠陥も含めて、生きた全体であったケマリズムを、知的に過ぎる批評の目で検討することは必ずしも当を得ていることとはいいがたそうである。もっとも、それではどのような批評が現出すべきかということになると、知的な回答で覆いつくせないだけに回答の提出は困難なのではあるが。

参 考 文 献

- MAKAL, Mahmut: *Bizim Köy, Ekin Basımevi, İstanbul, 1950.* (邦訳, 尾高, 勝田共訳: トルコの村から, マフムト先生のルポ。社会思想社, 1981)。
- STIRLING, Paul: *Turkish Village. Weidenfeld and Nicolson, London, 1965.*
- LEWIS, Bernard: *The Emergence of Modern Turkey. Oxford U.P., 1961.*
- RUSTOW, Dankwart A. ed.: *Political Modernization in Japan and Turkey. Princeton University Press, 1964.*
- Алибеков И.В. *Государственный капитализм в Турции. М., 1966.*
- HERSHLAG, Z.Y.: *Turkey, The Challenge of Growth. E.J. Brill, Leiden, 1968.*
- BEŞİKÇİ, İsmail: *Doğu Anadolu'nun Düzeni. Sosyo/Ekonomik ve Etnik Temeller. E. Yayınları, İstanbul, 1969.*
- İNAN, Afet: *Devletçilik İlkesi ve Türkiye Cumhuriyetinin Birinci Sanayi Planı 1933. T.T.K., 1972.*

KARPAT, Kemal: *The Gecekondu. Rural Migration and Urbanization*. Cambridge U.P., 1976.

YAVUZ, Fehmi, KELEŞ, Ruşen, GERAY, Cevat: *Şehircilik, Sorunlar-Uygulama ve Politika*, Ankara Üniversitesi Siyasal Fakültesi Yayınları No. 415, 1978.

HALE, William: *The Political and Economic Development of Modern Turkey*. Groom Helm, 1981.

Данилов В.И., Моисеев П.П. и Орешкова С.Ф. /ред./ Турция, экономика, политика. Наука, М., 1984.

Türk Dil Kurumu: *Türkçe Sözlük. Bilgi Basımevi*, Ankara, 1974.

Genel Nüfus Sayımı 12.10.1980. Başbakanlık Devlet İstatistik Enstitüsü, Ankara, 1984.

«RÉSUMÉ» *BOOK REVIEW*

ON ATATÜRK AND THE MODERNIZATION OF TURKEY
EDITED BY JACOB M. LANDAU, REVIEW PRESS/E.J. BRILL, 1984

Iwao KAMOZAWA

The modernization of Turkey has often been compared with that of Japan, as typically shown by the book 'Political Modernization in Japan and Turkey' (A. Rustow, ed., Princeton University Press, 1964). The modernization of Turkey has been, indeed, quite like that of Japan, Westernization. However, a brief glance at the present situation of the societies of the two countries shows different courses of modernization, not to mention different levels achieved. Fundamental differences are exhibited in the religious ideology of the mass, the orientation of rural people to the central government, the development of spontaneous settlements in urban areas, and the phenomenon of exportation of workers abroad. The course of modernization in Turkey is of much interest to Japanese for the purpose of reflecting upon and reexamining their own course of modernization and their newly experienced high economic development.

The book here reviewed is a collection of the proceedings of the International Symposium on Atatürk and the Modernization of Turkey, held at the Harry S. Truman Research Institute for the Advancement of Peace, Hebrew University of Jerusalem, in October 1981 to mark the centenary of Mustafa Kemal's birth. Similar symposiums were held in Turkey in the same year. The site of discussions, it must be noted, had their influence on the

content, with those held in Turkey being influenced by an atmosphere of nationalism and the military, and that of Israel having a strong (but unmentioned) undercurrent of Zionism.

The book consists of five parts: 1) Kemalist Ideology, 2) Political Culture and Bureaucracy, 3) Social and Economic Issues, 4) Westernism and Culture, and 5) Perceptions of Kemalism. Eighteen scholars from 6 countries (one from France, two from Great Britain, six from Israel, seven from Turkey, one from the United States, and one from West Germany) contributed papers.

Readers of the book can understand that the symposium was well-organized. Two main aspects of Kemalism, the historical roots of Kemalism in the Ottoman period, and the validity of Kemalism today as compared to the early days of the Republic, were fully and successfully explored by the contributors.

The well-organized proceedings, however, leave much to be desired. The scholars who criticize Kemalism as being overly Western-oriented, are themselves guilty of a different type of Westernism. Their point of view is over intellectualized, whereas one wishes to hear the voices of the rural Turks today, in the manner Mahmut Makal (*Bizim Köy*, Ekin Basımevi, İstanbul, 1950) presented the subject 35 years ago. In particular, almost no efforts were made in the book under review to consider and understand, or at least refer to, the situation of minorities in the state. This issue was carefully analyzed by İsmail Beşikçi (*Doğu Anadolu'nun düzeni, Sosyo/Ekonomik ve Etnik Temeller*, E. Yayınları, İstanbul, 1969). One would like to hear more about it. Readers of the proceedings can only surmise that the environment of Israel, where the open discussion of the situation of minority Arabs is not welcome, had its influence on the symposium.